

目 次

日 程	1
進 行	2-27
参加者名簿	28-29
参加者データ	30
アンケート結果	31
総括にかえて	32



日 程

1. 開会挨拶・オリエンテーション 9:00～9:15
挨拶 桜井 義維英（自然体験活動推進協議会 事務局長）
高田 研 （岐阜県立森林文化アカデミー 教授）
藤原 一成 （文部科学省スポーツ・青少年局青少年課 専門官）
2. 特別講演 9:15～10:15
『自然体験活動の可能性について』 株式会社モンベル 代表取締役社長 辰野 勇
3. 団体紹介（事例発表） 10:15～12:00
〈昼食・休憩〉 12:00～13:00
4. 分科会 13:00～15:00
□セッション1 13:00～14:00
「施設・機関が取り組む自然体験活動」・「エコツーリズム・グリーンツーリズム」・
「教育旅行」・「指導者・資格」
□セッション2 14:00～15:00
「まちの自然体験」・「学校教育と自然体験活動」・「川」・「森・山」
5. まとめ 15:00～15:55
各分科会各セッションコーディネーター
6. 閉会挨拶 15:55～16:00

□ 開会式 全体会場

開会の言葉

自然体験活動推進協議会 桜井 義維英

この会の企画した時点に考えていた人数を大幅に超える方々にお集まりいただき、とてもうれしい。できるかぎりいつものお友達・仲間と一緒にならず、全然今までの縁のなかったジャンルの方たち、自分と違うジャンルの方とぜひ話してみしてほしい。そして、実際に今度地元に戻って、今まではまったく縁のなかった方と一緒に活動ができるようになる、そのきっかけをつくっていただけるとありがたく思う。

また、自然体験活動推進協議会にまだ入会していない団体の方は、よかったら入会いただければ嬉しい。

私も一日いろんな方にご挨拶させていただくことで有意義な一日としたい。みなさんもぜひ有意義な一日にしてほしい。



岐阜県立森林文化アカデミー 高田 研

本学はこの3月で開校から丸4年が経った。ようやく卒業生を社会に出、いろんな自然学校にも出ていった。北は北海道の野外財団、静岡のホールアースさん、岐阜の白川の自然学校さん、河合村の天生の自然保護の仕事、さらにたくみ塾さんなどにお世話になっている。これからも、本学は岐阜県内の自然体験活動をされているみなさんと積極的に交流して、ネットワークの構築をしていきたい。今後ともよろしくお祈いします。



文部科学省 藤原 一成

学力低下の問題が社会的になっているが、文部科学省は「学力低下ですね。自然体験なんている場合じゃありません！これからは勉強です」なんて一言も言っていないので誤解をしないでほしい。今の子どもには「3つの低下」がある。【学力】は確かに低下している。次に【体力】。実はずいぶん前に指摘されてからこれは長い間深刻な問題となっているのだが、あまりマスコミに問題としてとりあげられない傾向にある。さらに【意欲】。調査では知識の量を計るだけでなく、意識も調べているのだが、学力以上に深刻なのがこの意欲低下。今の日本の子どもたちには「学ぼうとする」意欲ががまったくくない。最下位を争っているのはおとなりの韓国の子どもたち。どことなく似ているのだろう。



さて、学力低下、意欲低下、体力低下、このうちどれが一番問題なのだろうか？

いろんな体験を自然の中でしよう、自然の中でおもいっきり遊ばせよう、人と直接生身で取り合ってもらおう、そういう体験は絶対に大切だ。自分自身がそうしてこなかったからこそこう言える。こうやって自慢げに話をしているが、自分ほりんごの皮も向けないし、針に糸を通すこともできない。なぜなら、私自身が体験をしてこなかったから。そして、発達段階に応じたクリアをしてきていないので、それなりの時に自分なりに苦労してきた。そういうことを子どもたちに経験させたくないと思う。

今こどもたちにとって大切なのは、机にしがみついて勉強することか？ ——いや、そうではない。勉強する方法はフィールドの中にたくさんある。それこそ「自然が先生」。自然体験を子どもに教えていく義務が大人にはもはや課せられているという認識に立っている。そしてそれは、地域のひとりひと

りの大人が自覚して子どもたちと接していくしか他にないのではなからうか。

□ 特別講演「自然体験活動の可能性について」 全体会場

株式会社モンベル代表取締役社長 辰野 勇

1975年に株式会社モンベルを設立し今年で30周年となる。「モンベル。それは美しい山（花）私たちは自然がどんなに美しく、自然に振舞うことがどんなに素晴らしいことか知っています。」振り返ってみるとこの30年間、ずっと同じメッセージを発信している。



[モンベルを設立するまで]

高校1年生の時、ハインリッヒ・ハラーのアイガー北壁登頂記『white spiral（白い蜘蛛）』の一節に出会い、登山を始めた。近くの六甲山へ毎週末行きロッククライミングのトレーニングをしていた。当時、二つの将来の形を思い描く。一つは日本人初のアイガー北壁登攀・生還を成し遂げること。二つ目は自分でビジネスを始めるということ。高校では大学進学コースにいたが、明確な将来像を持てたため大学への進学をやめ、高校卒業後は名古屋のスポーツ用品店で住み込みとして働いた。その頃の自分自身の課題は「誰も登らなかった山に登る」ことであって、「どこまで自然に対して自分の領域を広げていくことが出来るか」という挑戦意欲がモチベーションであった。

登山を始めてから5年後の21歳で、ヨーロッパアルプスの三大北壁の一つアイガーに登攀。日本人としては2番目の登攀だった。そして、28歳の時もう一つの目標である登山用品メーカー株式会社モンベルを設立した。その頃から「自然というものはあまりにも偉大すぎるもの、挑戦というようなことはおこがましいことで、むしろ自然の中に自分自身がどう受け入れられていくか」というように感じてきた。自分自身が自然の中で学んだことがたくさんあった。

[生きる力]

高校1年で将来像を描けたために大学へは進学しなかったが、今まで後ろ指されることもなくやってこられた。それは、自分は登山の過酷な現場の中で「生きる力」というものを身に付けてきたためであると確信している。この「生きる力」とは、「集中力・持続力・判断力」のことであり、生きていく中で最も大事な力である。そして、人間の力というものは無限であり、これらの力をつけるための方法論は無限にある。例えば、勉強をするという環境の中であったり、社会の現場であったり、スポーツであれば例えばサッカーをする際に、それぞれのフィールドの中でその力を身に付けていくことだと思う。

知人の弁護士とこの生きる力について話をした際、彼はビジネスでは経営者に要求されるもう一つの大切な要素があると言った。それは「決断力」。自分にとっての「決断」とは、あえて困難な選択をした時である。今までに7回ほど「決断」をしてきた。

[可能性とリスク]

高さ15メートルの滝をカヤックで垂直に下りたことがある。自分の中には挑戦したい気持ちと、失敗して死傷するのではないかと恐怖心がせめぎあう。やりたい。じっとその滝の流れを見ているうちに、ひょっとしたらできるかもしれないと思えてくる瞬間がある。自分の心の中では、ジギルとハイドの両方の声が聞こえてくる。思考が交錯する状態の中で、やがて、全く不安がなくなり100%行けると思える瞬間が訪れ、その時に漕ぎ出した。可能性とリスクが五分五分の状態では進めないが、51%の可能性と49%のリスクであれば、自分の中で可能性の方が1%でも高ければ、自分を信じて突き進む。自分にとっては「できる！」のだ。本人にとっての可能性とは人それぞれの持っている力や経験から生

まれるものであり、最大100%の可能性というのにはありえなく、やってみないとわからないのである。

[Leading edge]

なぜ自分は命がけのことをしてきたのか。それは、人がしていないことをするという挑戦意欲を持ち続けていたからだ。我田引水だが「Leading edge（報告者注：最先端のこと）」をしてきたという自負がある。

例えば、花岡青州やジェンナーや野口英世のように命をかけて人が成しえなかったことに漕ぎ出していった人たちがいた。しかしアントレプレナーと呼ばれる起業家精神を持ち社会を切り開いていく人たちに対して、世間があまりにも冷たい。自分でビジネスを始めることは大きな冒険なのだが、日本ではそういう人たちになかなか光を与えない。自分の理解できないことを他人がやるとどうも拒絶反応を示すキライがある。

福井で関西学院の大学生が遭難したことがあった。マスコミは一様に無謀だという報道をしていたが、計画書を見たところ素晴らしい内容であった。学生時代に山登りを志す人は貴重な存在である。レスキュー体制が未熟であるのが問題であるのに、チャレンジした学生を非難するのはおかしい。スイスのようなレスキュー体制が必要だ。

野外活動する際には、大きなリスクがある中で、それも社会的なインフラが整っていない中で行っていかなければならない現実を十分に認識して取り組んでほしい。またインフラをも整備していこう、とする心構えを持ち進めていってほしいと思う。自分がCONEのような組織を支援したいのは、個人や組織1つでは力が及ばないことについて、自然体験活動をしていこうとする個人や団体を大きな輪としてサポートする組織であってほしいという願いからである。

[Sustainability（持続可能性）]

NPO 法人も企業も行政もすべて、団体の存続は社会的な意味合いがどれだけきちんと持てるかによるものであり、それなしでは存続は無理である。企業としての利益追求だけでははく、社会にどう受け入れられるかということがポイントとなる。そして利用者側にも受益者負担（システムやサービスなどのソフト面に対価を支払う）の概念を広める必要がある。

経済的に後進国と呼ばれる国の生産物を少々高く買い取ることで生産者の自立を促す。こうした取引を「フェアトレード」と呼ぶ。この経済的支援が彼等のこどもたちに学校教育を受ける機会を与えられることを消費者にPRする必要がある。企業は生産者と消費者との掛け橋にしかならないが、消費者や社会に対し自分たちの活動をPRすることが必要である。

[最後にひとつ、コマーシャルとして]

モンベルクラブという会員数が8万人の会がある。ポイントプログラムでは、WWF・日本野鳥の会・自然保護協会とコラボレートして、顧客が金額に応じて貯めたポイントを自分のための景品交換だけではなく、環境保護団体への寄付が選択できるようにしている。ぜひ加入してください。

□ 団体紹介（事例報告）

< A会場 >

メタセコイアの森の仲間たち

三浦 嘉門

平成12年7月にNPO法人としての活動を始めた。5年目となる昨年度には、のべ1万7千人以上の子どもたちと自然体験活動を行なった。郡上市にある郡上八幡自然園を拠点に郡上全域をフィールドとし、自然や文化を感じられる体験活動を実施している。特徴として、日本屈指の清流長良川を利用した沢登り体験やカヌー、お魚勉強会といった体験活動の実施があげられる。

「通学エコキャンプ」という事業を行っているが、これは今では少なくなった学年の異なる子どもとのふれあいや、日常はあまりやらない洗濯などの家事も体験していく特徴的なキャンプとなっている。また、「郡上八幡職人技発見ウォーク」では、旧八幡町内を歩きその文化を学ぶ。

プログラム活動を支援してくれる仲間として、いろいろな知識や経験を持った約80名の郡上体験活動支援員が、ボランティアとして指導や活動のバックアップをして下さっている。平成15年度からは文部科学省事業の一環として、「学校教育とNPOの関わり」をテーマに、地元小学校と連携して学校からの要望にあわせた多岐にわたる活動を行っている。



サイエンスワールド

溝口 喜久

サイエンスワールドとは、瑞浪市にある「岐阜県先端技術体験センター」のこと。現代は、科学的な知識はあっても、それがどうしてそうなるのかという「メカニズム」までは理解されていないことが多いのでは、と感じる。サイエンスワールドでは、自分の手で実験をしながら学習するための機材を準備し、子どもから大人まで幅広い年齢層への対応に努めている。また、遠隔地については「サイエンスコンテナ」を用意しており、実験室そのものの出前も行っている。

遺伝子の組み換えや液体窒素を使った極低温（ -200°C ）体験といった先端科学の実験から、乗ってきた車の排気ガスを測定したり、近くの河川の浄化作用や水質調査といった身近な実験までカバーしている。「ひとり1実験」を大切に、実験器具も豊富に準備している。

県内5ヶ所の産官学施設と提携し、他施設・他組織とのかなり連携も進んできたと自負している。「環境問題は必ず解決できる」をモットーにこれからも活動を進めていきたい。



ひだ位山ふるさと学校 中島 照雅

ふるさと学校は、旧宮村（平成17年2月の合併により高山市）の有志によって組織されており、メンバーは、グリーンツーリズムや体験学習の関係者を主体に22名で活動している。

自分たちの活動が地元への貢献と社会的に有意義なものとなるように日頃から意識することを目的に、現在NPO法人格取得の申請を行っている。

こうした趣旨から、「村民研修推進大会」や「さようなら宮村、ありがとう宮村」など、地域住民を対象とした企画もいろいろと行っている。地域の人には、身近ゆえあたりまえすぎて日頃訪れる機会がないようなところでも「出会いが再発見」となることが、活動を続ける中で幾度かあった。

また、主に子ども向けのプログラムとして、「サタデースクール」や「その日の自然図鑑」といった体験学習プログラムも行っている。



ぎふ山の日ネットワーク 安江 純一

「ぎふ山の日」というのは8月8日のこと。この「山の日」活動を推進していくため、岐阜県山林協会、岐阜県森林組合連合会、岐阜県木材協働組合連合会、岐阜県緑化推進委員会、岐阜県からなる運動推進実行委員会を組織している。それがぎふ山の日ネットワークである。

平成16年度の活動のキャッチフレーズは「山は街の生命」。ネットワークとしては、現在は広報、特にホームページの充実に力をいれている。みなさんもぜひ岐阜県の基盤整備部農山村整備局緑化推進室よりアクセスしてほしい。ここには、県内の森林に関わる団体や関係施設、イベントなどの情報を掲載し充実させていきたいと考えている。

紙面での広報については、岐阜県山林協会の「森林のたより」を活用している。岐阜ラジオでも日曜日の夕方に「森と木のぬくもり」というコーナーを持ち広報活動にあたっている。

これからも、森林整備や環境教育などの団体とのネットワークの構築を進めて、県民の山についての理解へと結び付けたいと考えている。



白川郷自然共生フォーラム 加藤 春喜

白川郷自然共生フォーラムはNPO法人。全国の環境NPO関係者、白川村民、トヨタ自動車の関係者で構成されている。

トヨタ白川郷自然学校については、トヨタ自動車が「場」を提供し、当フォーラムが運営を行うスタイルをとっている。この自然学校では、「共生楽園」と銘打って自然と人間、過去と現在、現在と未来との共生を目指し、広い意味で「環境」に関心のある大人をターゲットに活動を展開していこうとしている。エコリゾートをベースに、一般的なイメージの自然学校のみならず、目に見える環境貢献型プログラムを展開する計画である。それはつまり、「自然学校」の新たなイメージづくりへの挑戦だと考えている。

エコリゾートとしての機能としてホテル仕様の部屋や本格的フレンチ料理、天然温泉を用意した。目に見える環境貢献型プログラムとしては、ブナの森や古道の再生、ギフチョウの生態や世界遺産の水田といった保全活動を行う計画である。現在、様々な特典があるNPO会員の募集をしている。みなさんもぜひ。



岐阜県立森林文化アカデミー 小橋 宏充

本学の前身は林業技術短期大学。『森林と人との共生をめざして』という理念のもと、平成13年4月に開学した。専修・専門教育として、森と木のクリエイター科（対象：大卒程度）と森と木のエンジニア科（同：高卒程度）の2科を設置している他、林業関係者を対象にした短期技術研修部門、県民全般を対象にした生涯学習部門がある。

今日では「森林」とひとことで言ってしまうが、そもそも日本人は50年ほど前までは、森は守ることを、林は壊したててを生業としてきた。

本学では、自分の足もとをしっかりと見つめ、デザインの大切さを意識しながら、新しい「森林文化」を探求していきたいと考えている。

アカデミーの学生は、ここへ来るまでの経歴もさまざま。授業については、一般の学生を対象に年4回ある林業実習などを通してプロの技術を現場で学ぶ。子ども向けの体験学習(キャンプ)を夏・冬に学生主体で実施しているが、山仕事や建築などのプロの技術を手法に織り交ぜながらプログラムを展開している。岐阜県民の財産として、本学そのものだけでなく輩出した人材を様々な分野で活用してほしい。



長良川自然学校 庄治 正昭

長良川自然学校は、平成15年4月に任意団体「にこにこクラブ」として発足し、平成16年3月にはNPO法人格を取得した。

自然学校を「持続可能な自然環境についての学び場」とし、岐阜市三田洞のながら川ふれあいの森での「にこにこクラブ」（親子向け）や「にこにこKIDS」（子ども向け）の環境教育イベントを行うとともに、森林インストラクター試験対策講座として「野の遊び人養成講座」、旧洞戸村で林業体験やログハウス作りを行う「洞戸ランバージャッククラブ」などを行ってきた。

こうした事業により、体験することにより責任の持った行動が取れる経験をすることにより責任の持った行動が取れる人材の育成を行ってきた。

運営スタッフは各種資格も積極的に取得している。平成17年度はカヌーやスローライフをテーマにした講座を加えて行く予定である。



< B会場 >

森の自然学校 青柳 博樹

「森の自然学校」は、オークヴィレッジの自然体験活動部門。特色はものづくりで「つくる力はいきる力」がテーマ。プログラムは「作る」・「食べる」・「楽しむ」を重ね合わせている。例えば、作ったフライパンでパエリアを作って食べ、作った器や銀杯で食事する。ものづくりから食べることまでつながるプログラムを提供している。子どもキャンプでは、レザークラフトと木工により1人1作品を作る。キャンプ中は帽子や腰に付ける道具入れを身につけて過ごす。リピーターの子どもは自分の作品をたくさんぶら下げてキャンプしている。スノーシューも手作り。参加者には木以外もいじることで「何でもできるんだな」と実感してほしい。伝える側も一緒に作り、最終的にはみんなで楽しめる場所であればよいと願う。

場所は高山市清見町、東海北陸道高山西インターを降りて道の駅の目の前にある。スタッフ募集だが、自分はたまたまキャンプスタッフバイトから職員になった。定期的な正規採用はない。こまめに連絡を取ることがお薦め。希望者にはDMや今後発行のメールマガジンの配信もある。子ども対象キャンプは年3回実施。夏春は3泊4日、冬は2泊3日。募集はDMやオークヴィレッジ通信にて行い、参加者は全国から来る。



北方町ふるさと自然発見工房 坂下 文雄

北方町は非常に小さな町。合併もしなかった。円鏡寺の門前町として発達。古い家にはうだつがあがっている。自然発見工房の活動は行政と手を組んでやっている。ここでは、町で子どもたちと一緒にやっている活動を紹介したい。

そもそもの問題意識は「まちに自然がほとんどないが、それよりも子どもが外に出ないのが悲しい！」という思い。そこで、とにかくやれることからやろうと活動を始めた。まず、寺町地区の小川にホタルの放流をはじめた。平成14年から取り組み

はじめ、昨年夏にまちで20年ぶりにホタルが復活した。目標は小川にホタルが乱舞すること。先日、町にリサイクルセンターできたが、中にビオトープをつくってもらい、昨日ホタルを放流してきたところ。

そのほか、子どもの居場所づくりとして「北方ふれあいクラブ」事業をしている。内容はネイチャークラフト・アウトドア・農業体験・実験教室など。また、「北方町こども教室」事業もしている。こちらは地元の大人がスタッフ、現在34名になった。今後も町でのとりくみを続けていきたい。



森林インストラクター岐阜 杉田 勇人

「森林インストラクター」は森の案内人。インタープリターであり、森と人を“つなぐ”役割。「森を利用する一般の人に対して森林や林業に…」という長い公式な定義もあるが、活動の目的は、技術交流・研究・普及。

平成5年設立し、会員数は現在66名。年齢層は20～60代、個性的な会員が多いため得意分野は幅広く、山菜から野外教育まで。講師依頼も多い。最近では昨年8月に森林愛護少年団で森林でのウォークラリーとぶり縄による木登りのプログラムを実施。会員向けの研修も毎年行っている。今年度は美濃加茂文化の森里山活用プログラムづくりをワークショップ形式で行った。普段の活動は会員の個人ベースの教室開催が多い。今年は万博のインタープリターをやる人もいる。

養成する人材像は「森案内は地域環境を活かす」「感じ、考え、感動し、行動できる」「森林管理の大切さを伝える」インストラクター。

森林インストラクターの試験だが、15年度の合格率は1200中239人で、19%。筆記試験科目の森林林業分野や難しいようだ。これからインストラクターを目指す方も準会員として参加できる。



森林たくみ塾 小木曾 賢一

「森林たくみ塾」は高山市清見で「森の自然学校」と同じくオークヴィレッジグループ内で木工を教えている団体。事業の特徴は ①木を軸足にした環境教育 ②木を使う人材養成（家具製作） ③行政と連携した施設運営（ひだ清見自然館）の3点。今日は木に軸足を置いた環境教育プログラムを紹介したい。

プログラムの目的は子どもを森に連れていくこと。間伐からものづくりまでを体験。清見中学技術科授業として実施。時間は6日間で合計35時間、コマ切れにならないように学校と調整して時間をまとめてもらった。清見中学校では担当教員が不在のため行政からプログラムの依頼があり、企画運営は高山市と一緒にやった。

プログラムの流れ…森へ入る→木を切る→製材（パーツに加工）→製作→発表会ポイントは、使えるものを作ること、伝統工法のほぞ組みで作ること、県産材の杉を使うこと。

私たちのプログラムは全て「くらし・材料・技術」をテーマにしている。「森林たくみ塾」自体は、実践教育で木工職人を養成するところ。品質・原価・納期の枠内での製作活動があり、そこから環境教育も生み出している。



山と川の学校 三島 真

郡上八幡を中心に、子どもたちに自然体験を提供している。『冒険キッズ』という名称で、年間1万人をこえる子どもたちを受け入れている。

今、教える側の若いスタッフに、自然に接した原体験が少なすぎると思う。山や川で遊びまわり、楽しい思いやこわい思いをしていないと、子どもたちに本当の意味での自然のすばらしさを伝えられないと思う。技術や知識が先行して、自然を「研究対象」のように見てしまう自然体験ならいらないのではないか。

「遊び」をとおして、チャレンジして成功した時の達成感や、失敗したときのくやしきなどが子どもたちをひと回り大きくする。そうした原体験が、人間に「自然」とつながる能力を育てる。そして初めて知識や技術ではない「自然」からのメッセージが聞けるようになる。

私たちは、子どもたちに「教える」というスタンスをとらない。子どもたちが「自然」に出会えるように、その機会とスペースを提供している。私たちのスタッフの役割は、その機会とスペースに子どもたちが無理なく馴染んでいけるように導入することだ。子どもといっしょにめいっぱい遊び、子どもたちのモチベーションを上げることがスタッフの一番大切な役割だ。だから、スタッフは素人でいい。子どもたちといっしょに自然に感激し、うまくいったら喜び、失敗したらくやしがる。感性を子どもたちと共有できるスタッフが必要だ。そのために年4回、遊びの研修を受ける。その研修を受けないと、その季節のプログラムには参加できない。興味のある方は、ぜひスタッフとして登録してほしい。



10年の活動歴から反省として、お膳立て・おもてなしのイベント参加型ではだめであり、子どもが自分で気づき、学ぶ参画・創造型へと変えていくことにした。「体験」は目的ではなく手段として、不足の中やうまくいかないことや思い通りにならないことを経験することで子どもは育っていくものだ。プログラムとしては過去10年はイベント単発型であったが、現在は通年発展プログラムとして行っている。

「ガリバー冒険隊」の活動は、キャンプ中心の野外活動と手作りの旅の2本立て。食事づくりの全てを自分たちでやり、目的地まで自分たちで移動し、生活の拠点はテント。自分たちで「作り上げる」と「日常的体験活動」や、小さな問題解決の連続のなかで「結果」よりも「過程」を大切にしている。

自分たちで調べたり考えたりすること、仲間たちと相談して合意点を見い出すことや、判断することや決断すること、行動してみることに、迷いや行き詰まりにぶつかり、思い直してもう一度行動することを大切にしている。子どもたちに付けてほしい力とは、自ら考え判断し、行動する力、共に生きる力である。そして地域社会に貢献できる力になりたいと思い、今年度からは青年を育てる活動も一緒に進める。

費用は参加者の実費負担、スタッフは全部ボランティアで運営している。



毎年実行委員会形式で全国持ち回りでやっている。今秋、岐阜で開催される。内容は里山活動。

「会議」のこれまでは個々の活動から、「雑木林研究会」が呼びかけ、第1回は名古屋で始まった。これまでは個々の活動は温度差があり、これまでの開催地はそれぞれ里山活動がさかんなところで開催されてきた経緯がある。

今回は「長良川で考える 雑木林な流域づくり」というテーマ。森のことばかりでなく、流域全体を考えていく。雑木林を「=雑多な木=色んな人、森がある」と見立てている。天然里山林だけでなく、人工林も含めた全体森林を指している。

「会議」にむけてみなさんにお願いが。現在仮事務局でこれから体制づくりを始めるので、さまざまな人に関わってほしい。文科省、環境省は後援しているが、協力は民間団体、企業、活動団体のすべてだ。もちろん実行委員も募集している。岐阜県内外の色んな団体が参加する。ぜひ岐阜以外で活動している人達と出会える機会に参加する価値があると思う。

思いとしては県全域だが、全国に発信しやすいのシンボルが長良川なので、長良川流域、を表に掲げた。「森と市民の会」は今年愛知で全国大会があるが、団体の違いは立ち上げ出発点が全くの市民か行政かという違い。やっていることはかなり重なるので、これからは視点を共有していくことが大事だ。



< C会場 >

美濃青年会議所 遠藤 喜之

「子どもたちに自然体験活動を通し命の大切さ、また、そのつながりを伝えたい。」を理念に活動している。会議所全体としては、まちづくり・人づくりとかかげ、青少年を含めた事業を行っている。会議所への年会費を助成金として利用した活動のため、子どもたちには無料で参加してもらうことができる。

活動の一つ『カワゲラウォッチング』は、少ないときでも40名ちかくの参加者が集まる人気の事業。カワゲラの観察や水質調査を行う。

『美濃JC里山探検隊』は、岐阜美濃生態研究会、森林文化アカデミーの蝶の専門家、動物生態学の専門家の指導を得、地域の子どもたちとギフチョウの探索を行っている。さらに、チョウの採取から鱗粉転写（複本製作の一技法）、電子レンジで簡単に作れる春をテーマにした押し花づくり、などを含んだ多くの内容を子どもたちと共に行い、最終的には、子どもたちが自分自身の手で、一日かけて学んだことを一人一人がまとめた「自分だけの探検ノート」を制作するまでの活動を行っている。



こもれびの里 東白川体験倶楽部 村雲 和裕

活動の理念を、「人と人、自然とふれあえる体験活動を通し、東白川の文化を伝えたい」とし、さまざまな活動を東白川村で行っている。

市町村合併による「村」の消滅により、岐阜県にたった二つとなってしまった村、白川村と東白川村。その東白川村で、実際の村おこしにつながるような体験活動を行っている。参加者のニーズに応えながら、食からクラフト、陶芸と多くの体験活動を行っている。

ハコメガネ（木製の枠の底にアクリルの板をしいたもの）という道具をつくるクラフトキットを販売しているが、その部材に地元の材を使っている。さらに、その材が村のどこで生まれた木なのかわかるような表記を加え、森が大切にされている村だ、ということが伝わるよう工夫している。また、できあがったハコメガネを、実際に白川というフィールドへ出て使用してみる。このハコメガネを使った水中観察では、子どもたちが学校では見せないような笑顔を見せてくれる。

むらづくりの取り組みとしては、村全体の看板やガードレールのデザインの統一化を図り、村全体の景観も大切にしている。



ボーイスカウトの活動理念は、「青少年が個人として、責任ある市民として、地域、国、国際社会の一員として、身体的、知的、社会的、精神的な身体能力を十分に達成するよう彼らの発達に貢献すること」 スカウト教育では野外活動を特に重視し、中心的な活動としている。ボーイスカウトが一般に持たれているイメージとして、キャンプや募金活動を行っているものというのが多いが、実際にはもっと野外での活動を行っている。



幼稚園年長から大学生までの幅広い年層を五つの年層に分け、それぞれに即し、しかも一貫したプログラムに基づいて活動のデザインが行われている。国はもちろんのこと、国内の地域によってもそれぞれの特徴的な内容がある。さらにいえば、各々の団(長)によってプログラムを作成するため、その各団によってもずいぶんと活動内容が違ふ。

最近では、外の人、いわゆる「地域」との関わりを大切にして活動しようとする動きが見られるようになってきている。

今まで18年に渡りラフティングを中心とする「動力を使わない野外スポーツ」においてその専門的スキルを提供する株式会社 Outdoor Support System(ODSS)を運営してきた実績がある。しかし、ここでの利用者はごく一部の人達に留まっていた。



それに対しエヌエスネットは、行政やボランティアとの関わりが可能といったNPOの強みを生かしながら、①自然学校のネットワーク化 ②冬の森の活動における指導者養成 ③環境教育キャンプ の3本を柱により多くの人達を対象にした活動を展開している。

夏の子どもキャンプとして毎年2週間行っている「板取冒険自然学校」では、まず川に入って遊ばせる。このときライフジャケットを着用させることで早く水に慣れることができ、始めは怖がっていた子どもが午後には飛び込めるようになるなどの成長が見て取れる。また、キャンプは子どもがひとりもいない住民数38人の地区で行うことで、山の中の人たちの持つ技術を子どもたちに伝える場ともなっている。これも自然学校の大きな意義のひとつと考えている。

ODSS とエヌエスネットは、ODSS はエヌエスネットに機材を貸し出し、エヌエスネットは ODSS のスタッフ教育を行うなど相互の連携を持って活動している

南飛驒自然塾

尾藤 政勇

南飛驒自然塾の行っている4泊5日のキャンプでは「生活体験」が主要なテーマになっているため、一般に言われる『キャンプ技術』については火おこしぐらいしか教えていない。

今の子どもたちはコミュニケーションが取れなくなっていると考え、あらゆる場面でコミュニケーションを取らなければ先に進まないようにプログラムを仕組んでいる。例えば、食事のメニューはすべて自由で、そのメニューを決めることから始まる。小学校3年生から中学校3年生までが対象だが、彼らはまず調理用具の用語が分かっていない。例えば「落し蓋」のことを「豚」と勘違いした子どももいた。

キャンプ期間中に何か成果を上げるということは狙っておらず、自分の周りの「生活の先生(=母親)」の存在に気がついて欲しい。そして、そのお手伝いがしたくなるといったように各自の生活が変わってくれたらいいと思う。

またキャンプのカウンセラーについては、安全管理をさせるだけの方針で、子どもにも「スタッフに頼るな」と言っている。頼りないスタッフの方がいいキャンプになるようだ。



馬瀬川フィッシングアカデミー

小池 永司

馬瀬村は、先日下呂市になった村だが、平成6年に村おこしの研究会が発足し、森と川と人の有機的繋がりを大切にしていきたいという視点で「エコリバーシステム」を活性化するため、多くの村おこしプロジェクトが取り組まれてきた。

例えば、自分たちの地域の美しさに誇りを持ってもらおうため、看板設置規制を設けるなど山村の景観整備への取り組みを進めたり、清流保全のため人工林の間伐促進や治山ダムの見直しなどを行っている。また、川と人とのふれあいを深めるために、川のインストラクターの養成や、川の駅づくりに取り組んできた。さらに、小さな山村でも自治権を持ち機能しているフランスの村への見学も行っている。

このような動きの中3年前から始まったフィッシングアカデミーは、釣りを通して自然を学んでもらうことを目的としている。釣りの名人を講師に迎え、男性だけでなく、女性や親子にも楽しんでもらえるようにしている。釣り人からは、「これまで意外に周りの自然に目を向けていなかった」「自然の魅力を再発見できた」と好評である。



どんぐりの森実行委員会 窪田 一仁

岐阜県の中でも、西濃地域は自然体験の活動団体は少ない地域であるように思う。どんぐりの会実行委員は、野鳥の会が中心となりS54年から探鳥会、S61年から自然観察会を行っており、現在20名が活動している。キャッチフレーズは「クワガタの住めるどんぐりの森」。この言葉のもと、森づくり活動を展開している。

具体的な活動内容は、四季ごとの自然観察会、クラフト、どんぐりコーヒー、どんぐりゴマ選手権大会、緑の相談室、どんぐり祭りなどがある。自然観察会には、300人もの参加者が集まり、夏のカワゲラの観察会は好評である。また、毎年11月23日を「木の実の日」にした。どんぐりの里親制度では、ポット植えのどんぐりを2～3年育ててもらい、それを市有地の3千m²の空き地に移植している。また、ガイドブックの作成も行っている。



< T会場 >

ガールスカウト日本連盟岐阜県第3団 羽賀 早紀

ガールスカウトはイギリスが発祥。中学生や高校生の少女を社会教育する団体である。年齢制限は下は5歳からだが上限はない。また、活動は女性のみで行うわけではなく、18歳以上の男性もサポーターとして参加している。日頃の活動は部門別に行いつつ、団体としての最終目標を「豊かな感性を持ち、自分自身と他人の幸福を願う気持ちを養う」ことにおいている。

各団それぞれが地域の特徴を活かしてプログラムを組む。その際、子どもたちが単にイベント的な参加になることなく、自分で考え、計画し、準備する過程を経験することを大切にしている。

子どもたちがあまり自然活動に興味がない現状を踏まえ、岐阜支部では身近な自然を意識して、週に3回、小学4～6年生を対象に市内の公民館を使用しながら自然観察会（例えば木の音を聴診器で聞いたりするなど）を行っている。

その他、主な活動として、「アフガニスタンの子どもの支援活動」といった社会的なものから「国内旅行」「お菓子づくり」など親睦を深めるような趣旨のものまでさまざまな取り組みを行っている。



ツリークライミング クラブ橙 上田康美さん

自分自身は山で暮らしている者で、本業はログハウスづくりと林業。2年前にツリークライミングの活動を始め、それがきっかけで今までよりさらに自然に興味を持つようになった。ツリークライミングを通して、生活文化を考えたり地域を活性化することを意識している。ツリークライミングジャパンの発行するライセンスを取得し、人を木に登らせる手伝いをするようになってから面白くなった。

ツリークライミングはLow & SlowでありDanger、Damage、Difficultの要素を取り除いたものである。

全国ですでに17,000人が体験しているが、特に目立つけが人は出ていないというとても安全なスポーツである。仕組みはメカニカルで、高所恐怖症の人やロープだけで木に登るのが怖いという人にもお勧めである。最近では、障害者の方もスタッフの補助で木に登れるようになっている。こうした取り組みは「ツリーセラピー」と呼ばれ、このツリークライミングをきっかけに、自分で立とうという意欲が出てきて、トレーニングを始めた人もいるという。今後はさらにフィジカルチャレンジャーを支援する活動を進めていくため、さらに安全に木に登ってもらえるようトレーニングをし、いろんなところで体験の場を提供したい。



大きな木・野外塾 杉山 三四郎

私は岐阜県出身で、今は絵本屋を経営している。併せて「野外塾」「言葉塾」を主催しているが、今回は野外塾の活動を報告するためにこの会に参加した。

野外塾は、子どもたちに岐阜の山や川のことをもっと知ってもらいたいという思いから活動を始めた。7年前の金華山で行った秋のデイキャンプの様相を紹介したい（ビデオによる紹介）。

自然の中で蛾の蛹（まゆ）を見つけたり、花を見つけたりする子どもたちの生き生きした笑顔。ある女の子は「ムシ嫌い！」という素直な発言も・・・ また、葉を丸めて笛を作ったり、山桜の木の皮を発見し、皮細工の話を知ったり、ホコリタケを見つけるなど、山の中でしか体験できない活動のシーンが続く。お昼ごはんは山で採ったムカゴ汁と竹ご飯。

子どもたちは、時間と空間と仲間を共有し、一緒になって「面白い」とか「驚き」を感じとる。また、お昼ご飯を森の中から集めてきたものを活かし、それをみんなと一緒に食べるのが大事な要素である。この野外塾はメンバー制で、定例的に活動を進めている。



岐阜県ネイチャーゲーム協会 原 令子

ネイチャーゲームとは、米国のナチュラリスト、ジョセフ・コーネル氏により考案されたさまざまな感覚を使って自然を直接体験する活動である。単にゲームとしての楽しさだけで終わる活動ではなく、自然を体験し、共感し、それを通して学習をする活動である。

例えば、「雪の雑木林」というネイチャーゲームがある。これは、夜にライトを消して雪のなかでカメレオンになりきるゲームであるが、こうした仕掛けでじっと雪の中で立つことで、風を感じ、木を感じることができる。

ネイチャーゲームでは、「直接的な自然体験を通して自然のつながりの一部としてとらえ、生きることの喜びを共有することによって自らの行動を内側から変革していること」を重要と考えている。これからも地域とつながる、人とつながる活動をしていく。岐阜県ネイチャーゲーム協会では、国立乗鞍青年の家でネイチャーゲームリーダー養成講座を主催するなどの活動を行っている。また、日本ネイチャーゲーム協会の主な活動は、「自然学校」「指導者養成」「調査研究」「普及と振興」「交流連携」である



国立乗鞍青年の家 田中 久治

国立の青年の家は、現在全国に13箇所ある。

岐阜県内に位置する国立乗鞍青年の家は、宿泊型の自然体験施設を標榜している。全体で400人を収容でき、標高1500mの高所に位置し、まわりを白樺林に覆われた環境の中にある。使用料は、1泊3食で1,760円のみ。2名の団体から利用が可能となっている。青年の家出の活動を支援するスタッフも6人配置されており、利用団体の趣旨に応じたプログラムの提供等を行っている。

宿泊棟以外の主な施設として「グラウンド」「体育館」を完備しておりスポーツニーズにも十分応えられる。また、周辺の豊かな自然環境を利用して、マウンテンバイク、登山、ハイキングなどに取り組める他、クラフトや音楽といったプログラムも行える。乗鞍のフィールドは本当に豊かであり、それを活かして自主的にプログラムを立て、さまざまなことが出来る。

施設主催のイベントも随時行っており、自然体験活動講座、障害者活動講座、スキー・ボランティア研修等、年間で20本くらいの企画を実施している。



オハヨーサンホテル 金森 洋子

高山市荘川町にある標高 1,000mに位置するオハヨーサンホテルは、荘川高原の周囲 2 kmには家がないという自然豊かな場所に位置している。

昔は、旅行といえば温泉、温泉といえば熱海、という考え方が主流だったが、最近では自然の美しさを体感できる旅行に注目が集まるようになった。現在は学校の利用も多く、年間 60 校が利用している。オハヨーサンホテルというネーミングは、お客様に名前を覚えていただけるように名付けた。

主なプログラムは、4・5・6月 は自然体験・田植え・ラフティング・山の手入れ 7・8月 は信州より涼しい環境を活かしての避暑、秋はお祭り、冬はスキーという感じである。

最近、中国や台湾、香港から 6～10 泊で修学旅行に来る傾向がある。それぞれにニーズや様子が違い、例えば中国からの場合は東京から周ってきて田舎で少しほっとしたい傾向にあるし、台湾からの場合は雪珍しさに来る。香港から日本に来るのはお金持ちの家が多い。こうした傾向をとらえながら、これからはこれからはインバウンドの教育に力を入れていきたい。



天生県立自然公園協議会 志田 成夫

天生県立自然公園は、岐阜県飛騨市川合町（旧河合村、白川村）に位置する。現在は、1,600ha を開放している。名古屋営林局が管理。

天生県立自然協議会の歴史だが、そもそもは、S 40 年に河合村が単独で山を大切にしようとする自然を管理し始めるのがきっかけ。H10 年 4 月には県立公園として登録され、それを機にパトロール制が導入された。協議会ではこのパトロールの業務とガイドツアーとを行っている。

天生県立自然公園は高山植物の宝庫といわれ、ここ数年見られていなかったような植物が毎年見つかるなど、日本でも類がない豊かな自然が残る場所である。昨年もウメガサソウが見つかった。

自然公園の管理のため、入山者から自然保護協力金 500 円をとるようになった。いろいろ意見もあったが、天生県立自然公園を守っていくために必要と決断した。

入山者数は H14 で 5,353 人、H15 は 7,441 人、H16 は 5,055 人で、うち 3 割の入山者がガイドを付けている。自然公園の管理が行き届いているという話を聞きつけ、わざわざ屋久島から 2 人視察に来たことがうれしく、励みになった。



□ 分科会 セッション1

「施設・機関が取り組む自然体験活動」 A会場

記録者：小橋宏充、岡本由

樹子

パネラー

洞口 健児 (アウトドアコーディネート)

久保田 達夫 (国立乗鞍青年の家)

川地 辰美 (県立エコミュージアム関ヶ原)

コーディネーター

三浦 嘉門 (メタセコイアの森の仲間たち)

参加者：25人



<設定された論点>

- ・立場のちがい
- ・担い手、指導者
- ・ニーズの変化

<パネラーからの話題提供>

洞口：施設についてのコンセプトづくりから、ハード・ソフトの両面での設計・運営を民間として請け負っている。現地での自然環境などについては、事前の調査、シュミレーションを重視して、初年から黒字を目指して運営できるように心がけている。自然体験活動の内容については、バーチャルではなく、リピーターを確保できるように、質の充実・向上に力を入れている。

人材については、現地をよく見て理解している人が、都会の素人を楽しませることが出来るよう養成することが望ましいと考えている。キャンプ場で働いていることを、地域の中で住民に対して誇りに出来るようにしたい。

久保田：青年の家は、高度成長期に勤労青年の研修の場として設置された。規則などで厳しい施設、という従来イメージがみなさんにはあるだろうが、現在は「楽しさ」に相当のウェイトを置いている。

最近「コミュニケーション」に対するニーズが高くなっていることを感じる。乗鞍青年の家では、自然のほかに異年代や障害者など様々な人との交流・他者理解などを目的とした事業に力を入れている。

利用者の受け入れに際しては、強みと弱みの相互補完が重要になっている。ゆえに様々なノウハウを持つ人とのネットワークが、ますます重要となってきた。

川地：エコミュージアムとして、自然・歴史・産業・文化などで周辺地域住民への貢献を常に意識している。基本方針は「郷土愛」を育てること。ビジターセンターとして観察会なども催しているが、これからは学校の先生を指導し、様々な自然体験活動が出来る先生を養成して行きたいと思っている。指導者養成については、せっかく資格をとっても、活用できていない人も沢山いるのでは、という実感がある。

公の施設ゆえに採算性は後回しになるが、とりあえず「知りたい気持ち」あるいは「やってみる」ことを大切に運営していく考えである。

子

パネラー

中島 照雅（ひだ位山ふるさと学校）

前田 博（京都造形芸術大学）

小林 由幸（グリーンツーリズムワーク
ショップファシリテーター）

コーディネーター

三島 真（郡上八幡山と川の学校）

参加者：36人



<設定された論点>

グリーンツーリズム・エコツーリズムは農山村の地域おこしの切り札のように言われているが、提供する側の農山村は高齢者が多く、ニーズは都市にある。地元でアンテナを張っている人材が不足。また、行政主導で進められることが多い中、地元中心でどう成立させていくか。さらに「どこいっても同じ」感が否めないが、それを無くすには。

<パネラー・コーディネーターからの話題提供>

中島：旧宮村での実践例について、「(財)都市農村活性化機構」の体験民宿事業を平成11年から実施している。へたに慣れた人よりも一生懸命やってくれるおじいちゃんおばあちゃんの話が顧客に印象深かったようだ。客の意見に育てられながらここまで来た感がある。

小林：行政の支援体制について、自治体の首長に「変わってもらう」ことが必要。行政が地元でコーディネートとマネジメントをしていく

地元では思いを伝えることが第一。熱い思いを地元の人が持っていない場合もあるがぜんぜんかまわない。こちらの思いが伝わることで目がひらけることもある。

前田：今後グリーンツーリズム、エコツーリズムに必要な「戦略」について、何をシーズにして地域を活性化していくか？という視点から提案したい。シーズ主体、つまり資源活用型で、運営は民間。商品開発はサービスよりモノで。地元には農林業、自然、文化のようなシーズがあるが、それを活かす人材がいない。人材供給システムが今後必要になってくる。

三島：地域での“コーディネート”について、町ぐるみで「流しそうめん」イベントを行った事例が郡上にある。

<出てきた論点>

地元主体でグリーンツーリズム、エコツーリズムを進めるには

- ①地域づくりの問題をどうするか
- ②ニーズを持っている都市からどう仕掛けるか

<質疑応答>

・グリーンツーリズム＝農林水産省、エコツーリズム＝環境省の縄張り争いについて

小林：もとの発想は両方とも一緒。縦割りでいろんな仕事が地元にくるからトラブルがおきているのかもしれない。

中島：団体紹介で「しなやかにしたたかに」という表現があったが、このしたたかさで。「使えるものはなんでも」でやっていく。行政の縦割りも逆手にとって使っていくこともありだと思ふ。

「教育旅行」 C会場

記録者：福寄順子、武藤千帆里

パネラー

下村 和人（日本旅行教育名古屋支店）

金森 洋子（オハヨウサンホテル）

萱場 祐一（自然共生研究センター）

上平尚（全日本スキー連盟）

コーディネーター

北川健司（エヌエスネット）

参加者：27人



<パネラー・コーディネーターからの話題提供>

金森：最近の子どもは受身だという印象を持っているが、いざ始まるとみな夢中になる。生易しい体験でなく、本物の体験の提供と、地域との交流を大切にしている。

萱場：実験河川での研究結果を見学者へプログラムとして提供している。公的機関であるため参加費は無料で、モチベーションの高い参加者ばかりとは限らない。ニーズを事前に把握するのが難しい。

上平：これからの時代は本物でないとお客さんが来てくれない。資格の判断基準に技術だけでなく、日常生活や人間性を重視することで質の高い指導員を育てたい。近年、組織も柔軟になり他に学ぶ姿勢が出てきている。

下村：体験型の旅行を15年前から提供している。体験型の旅行では、受け入れ側のリスク管理やライセンスの保有など信用があることが重要になる。また、例えばインストラクターを10人にひとりつける必要があるなどコストが高くなってしまいうことが課題である。

北川：リバーガイド協会や山岳連盟、CONEに登録しクオリティの向上に努めているが、その分どうしても料金が高くなる。他の視点として、旅行代理店がすごく勉強しているな、という実感がある。

<フロアーから>

- ・体験型の商品を学校や旅行代理店へどうPRすれば効果的なのか分からない
- ・地域に大規模宿泊施設がない
- ・体験型プログラムは価格が高いと思われがちだ

<パネラーから（効果的なPRについて）>

金森：その学校が何を求めているのか良く聴き、それに対応すること。ここに「来なければできない体験」を用意する。

上平：地域の知名度を上げるにはそこに「人」がいる必要がある。大きなイベントをやるより、人づくりと地道な活動を続けるべき。

下村：現在は、メールで仕事のやりとりをしている。宿泊施設や団体の情報は、書式が共通のフォームで統一されていると見る側に分かりやすい。また、まずはその学校の先生に来て体験してもらうことが有効である。また、大規模宿泊施設に関しては、最近は民宿やペンションなど小規模宿泊施設への分泊化が進んでいる

北川：岐阜県内で自然体験のデータベース化の動きがある。各団体間のネットワーク化を進めていこう。

「指導者・資格」 T会場

記録者：櫻井里栄、高橋敏之

パネラー

原 玲子（岐阜県ネイチャーゲーム協会）

小木曾 賢一（森林たくみ塾）

桜井義 維英（自然体験活動推進協議会）

コーディネーター

川尻 秀樹（森林インストラクター）

参加者：38人



<設定された論点>

資格を取っただけになってしまう人が多いことが課題である。活動してこそその指導者だと感じるが、どのような指導者を望んでいるのか？

<パネラー・コーディネーターからの話題提供>

原：地域の人々とのつながりを大切にして活動している。つながりそれ自体は広がりつつあるのに、予算などの事情からか、今一つ盛り上がりきれない。

指導者については、「指導」より「分かち合い」を大切にしている。地域や人とのつながりを持っている人材を望む。

小木曾：もの作りを通じて人間が育てられると感じる。これを環境教育に役立ててゆきたい。

指導者については、他人の長所を上手に伸ばせる人材を望む。そういう人材を育てられる指導者を養成するのがまた難しい。

桜井：CONEの目的は、資格を与えることではない。自然体験活動を広く知ってもらうために、ネットワークを活用してもらうことに意義がある。状況により様々なタイプの指導者が必要になる。その橋渡しをするためのネットワークである。団体ごとの縦割り活動をやめて、良いチームを作りたい。

川尻：様々なタイプの指導者がそれぞれの役割を持つという点は、生物多様性に通じるものがある。

<質疑応答>

・組織を立ち上げた当初は良いが、次世代が育たない。

桜井：自分たちの活動をもっと積極的にPRすることが必要ではないか。また、そういった広報・マネジメントを得意とする人材も大切である。

川尻：この場にいる若者を見れば次世代は育ちつつあると言えるのではないか。この集いはまず、こうして問題点を共有していく場である。互いに顔を突き合わせて知り合うことのできるこの貴重な機会をぜひ生かして、この先の議論を進めて欲しい。

□ 分科会 セッション2

「まちの自然体験」 A会場

記録者：小橋宏充、岡本由樹子

パネラー

杉山 三四郎（大きな木野外塾）

改田 哲（日本ボーイスカウト岐阜県連盟）

コーディネーター

木呂子 豊彦（ビオトープネットワーク）

参加者：14人



<設定された論点>

- ・身近なところがおもしろい
- ・異年齢との交流
- ・大人も楽しむ
- ・地域とつながる

<パネラー・コーディネーターからの話題提供>

木呂子：自分自身はビオトープの専門家。（報告者註：「ビオトープ」とは生物の生育圏のことをいう）

杉山：岐阜市内で11年間絵本屋をするかたわら、近くの山や川をフィールドに親子向けの体験学習教室をしてきた。子どものころは昆虫マニアだった。

改田：自分自身は子どものころのボーイスカウト経験はなく、自分の子どもの活動に付いていったのが始まり。それが長じて現在は指導者として関わるようになった。自分も、子どものころにもっとたくさん自然体験をしておきたかったと思う。

会場を含めた意見交換から：

- ・近くの田んぼの泥や、公園の落ち葉などもいい教材になる。
- ・子どもの川あそびが地域で伝承され、見守られてきた地域がある。
- ・子どものころのウサギ狩りをした記憶がいまだに強く残っている。
- ・東京で就職したとき、そこにも自然があることに気づいた。
→「まちでの自然体験」の可能性、とくに大人と一緒に楽しむことの大切さを会場全体で再認識
- ・地域の方の理解が得られないことで悩むことがある。
- ・まちでの活動ゆえ、活動場所の近くに住む一般の人の理解の有無が、継続性のポイントとなる
- ・公園でのたき火や安全への配慮など、内容によってはまちから離れたフィールドでの活動以上に「地域との関わり」が大切になってくることもある。
→自治会長さんなどを巻き込む。公園をビオトープにして、自治会を巻き込んで管理をお願いし、あわせて自治会の人々も含め地域の自然を見る機会にしたら。
- ・子どもだけではなく、大学生にも自然とのふれあい体験のない者が多い。指導者の対象となる青年層自体がもはや自然体験が不十分。指導を通して自然体験を重ねていくなかで、次第に活動することを受け入れ、表情もよくなってくる。

「学校教育と自然体験活動」 B会場

記録者：十文字美世子、白土久仁子

パネラー

大塚 之稔（日本野鳥の会岐阜県支部）

牛丸 久靖（日和田小学校）

藤原 一成（文部科学省）

コーディネーター

溝口 喜久（サイエンスワールド）

参加者：28人



<パネラー・フロアから出された学校教育と民間との連携事例>

- ・中学校の授業に30時間分入り込んで、森林体験から作品制作まで実施（ひだ清見自然館）
- ・教員志望の学生をスタッフとした「セカンドスクール事業」（国立乗鞍青年の家）
- ・県立専門学校と連携。事前のPTA研修を活用し地域につなげた（日和田小学校）

<出された問題点や課題>

- ・こちらが提供できるものに対する、先生方のニーズがなかなか見えてこない
- ・学校に呼ばれても話をするだけで外での体験はしてもらえなかったことがあった。
- ・中学校でツリークライミングをやっている例もあるが岐阜では10メートルの高さに登らせられない。どうすれば「危ないこと」を学校教育の中でできるのか？
- ・学校との接し方がわからない。直接乗り込んでいっていいのか？
- ・教員は視野が狭く、閉鎖的。超メジャーな老舗の団体のことしか知らない。
- ・「総合的な学習」のため外部への講師依頼が頻発し全体の予算がひっ迫している。結果、指導力は高価なものだがそれをただで使おうとしている部分がある。

<問題・課題の解決に向けて>

- ・子どものためにやるのだから、その思いを胸に、ねらいを明確にして学校と交渉する。それでもダメなら教育委員会へ。
- ・学校教育と地域の教育ではできることがちがう。これからは「学社連携」から「学社融合」へ。自然体験活動を進める側からPTAの研修として提案をしていくのは妙手、これによりきっかけをつくれるのではないか。
- ・先生は食わず嫌いが多い。食ってみてもらうにはまずは教頭先生から。12月頃に次年度計画を作り始めるので、その頃に交渉するのが実はねらい目。
- ・教員の研修として自然体験活動の指導者を呼ぶ。
- ・オリンピックセンターが出している「ゆめ基金」を助走段階で活用する。国民的意識としてソフトにお金を払う意識は低い、かといって体験活動を安売りしてはいけないのでは。

<まとめにかえて（藤原）>

自然体験活動を通じてどんな子どもを育てたいか？というビジョンが見えにくいという指摘があった。体験活動の豊富さと道徳感は関係するという調査結果はある。しかし、すぐに効果は見えにくい。それでも、逃げてはいけない。自分たちの業界をつくっていくのであれば、費用対効果を考えながら積み上げていくしかない。子どもは子どもで感じている。こっちはそれをちゃんとかえしていくことが必要。

「川」 C会場

記録者：福寄順子、武藤千帆里

パネラー

萱場 祐一（自然共生研究センター）
小池 永司（馬瀬川フィッシングアカデミー）
北川 健司（エヌエスネット）

コーディネーター

柴田 甫彦（長良川レンジャー協会）

参加者：25人



<パネラーからの話題提供と意見交換>

柴田：数年前から長良川の流量が徐々に減っているように感じる。

小池：以前にくらべ、雨が降るとすぐに水嵩が増し、そしてすぐに減っていくように感じる。

萱場：自然共生センターで現在研究が行われているがはっきりとした原因は特定できていない。川というものは常に変動していくのでとらえにくく、川底で起きていることを目で見るとするのは非常に困難。川上から川下まで全ての流域を調査しないと何が原因であるかも判別が出来ない。さらにこの調査は最近になって本格化してきたため過去のデータが残っていない。川の研究はなかなか難しい。

北川：上流から運ばれてくる泥が増加したとを感じる。その原因は、上流地域の開発で木を切り倒し、森を減らして、酪農、畑、高原などを増やしていくことにあるのではないか。

フロアーから：雪害木処理の遅れや林道の設置も泥の流出に関係があるのでは。台風23号の被害で、長良川の前例のない増水により川下の河口堰に大量のゴミや流木が流れ着いたが、その流木の多くは雪害木や間伐材など山から運ばれてきたもの。

柴田：はたして川を守るだけで川は美しいままで残っていくのだろうか？ 山を育てることが海を育てることに繋がる。海を考えると、必ず川上との連結した作業が必要不可欠である。

<フロアーより>

- ・多治見の地元の川が20年前よりも汚れていた。よくみると水の流量も減っていた。源流を綺麗にしなければ解決しないのでは。
- ・台風23号による増水は、長良川に流れ込む各支流の流量のピーク時が重なったという見解もある
- ・長良川の鵜飼での話だが、上流部の郡上市大和町で雨が降ると一時間で鵜飼をするあたりの川が増水するようになってしまった。以前よりも流量の変化が早くなっている。大和町で雨が降っただけで鵜飼の中止も考えなければいけなくなったという実態がある。

「森・山」 全体会場

記録者：櫻井里栄、高橋敏之

パネラー

野尻 智周（雑木林会議）
吉眞 陽子（天生県立自然公園協議会）
東出 修一（五色が原ガイド協会隊長）
水野 雅夫（ウッズマンワークショップ）

コーディネーター

武藤 貴幸（フリーランス）
高田 研（岐阜県立森林文化アカデミー）

参加者：63人



<パネラーからの話題提供>

吉眞：天生自然公園では、自然保護協力金の徴収、ガイド、パトロールを地元の人が行っている。有料化について、導入時は戸惑いの反応もあったが、現在は来訪者の理解を得られていると感じられる。たくさんの方が来るようになったことで、繁忙期の人手不足や歩道の踏み固めなどの問題が起きている。ガイド等メンバーの高齢化がこれからの課題である。

東出：五色が原でも有料ガイド制を実施している。安価ではないにもかかわらず、現在ではほぼ全ての方がガイドを利用してくれる。ガイドにとって、冬に仕事がないのが問題である。

水野：NPO法人として様々な森林整備ボランティア団体にかかわった経験から問題提起したい。各ボランティア団体は自分たちだけの意見、考えの中だけに満足し、閉じこもりがちである。問題点を指摘しても受け入れてもらえない。団体相互での問題意識の共有が不十分ではないか。

野尻：我々は高名な学者が教授するような立場ではなく、皆で考えていくスタンスでやっていきたいと思っている。次回の大会は岐阜での開催を予定している。流域全体をひとつの雑木林として考えるようなビジョンを提案したいと考えている。

<質疑応答>

・各団体の活動目的や理念について

吉眞：ガイドツアーを通じて地域活性につなげて行きたい。

東出：五色が原の良い環境と良い設備を維持して行きたい。

水野：林業業界の体質的・経済的な向上を目指したい。

野尻：雑木林会議は行政指導ではなく、各地の市民から自発的に起こった活動のネットワーク化である。この流れをもっと大きくして行きたい。

・人がたくさん来ることによる自然のオーバーユース問題について

東出：エコトイレを設置しているが、繁忙期には処理能力がパンクしてしまうこともある。

水野：リスク管理の観点から、一度に受け付ける受講者は少数に押さえている。しかし、参加費に跳ね返るのが難しいところ。我々は高いレベルのノウハウを提供する自信があるものの、行政が類似のプログラムを格安で実施してしまうことは問題と感じる。

□ 閉会式 全体会場

各分科会からの報告 司会進行：川尻秀樹

(内容については各分科会の報告パートを参照のこと)

みなさんそれぞれが、自分と抱えているのと似たような疑問や課題が出てきていたのではないだろうか。この集いは、集って、交流して、何かを起こすというのがねらい。1年後には何か起きるだろうと期待できる。私たちは大きな河川に目を取られがちだが、小さな流れも大事だとあらためて思う集いになった。

閉会の言葉

エヌエスネット 北川健司

この大会を開くための助成金(報告者注:河川環境管理財団からの助成金)を秋にもらい準備がスタートした。河川関係の助成なので本来は長良川流域だけが対象と考えるところだが、せっかくなのでその交流範囲を岐阜圏域全体と一気に大きくした。

今回はまず最初の第1回目。報告の時間・分科会の時間が短い、食い足りないなどなど、アンケートに要望や希望をたくさん書いてほしい。

NPOは小さなお金があれば動ける、参加のみなさんの思いが動くためには一番大事。岐阜県人は奥ゆかしい、活発に質問はしないが、深くうなづいている。本当に良い物であれば、認められていくだろう。

こういうネットワークづくりを目的とした集まりは他にもいろいろある。

「環境教育ミーティング中部」はトヨタ白川郷自然学校を会場に、2005年11月の最終金曜日曜日で開催予定である。環境教育という名前が付いているが、岐阜県内のみならず中部全体でネットワークを広げたい人はぜひ参加してみたい。

さらに、この集いを開催するための事務連絡用に「ぎふCONE」のメーリングリストがスタートした。みなさんもぜひこれにも参加してほしい。

これから岐阜全体で自然体験活動を盛り上げていこう、そのためにまずは風通しの良い関係をつくっていきましょう。



参加者名簿

	氏名	所属団体		氏名	所属団体
1	浅野 純一	NPO法人エヌエスネット	46	金森 洋子	オハヨーサンホテル
2	青柳 博樹	森の自然学校	47	上坪 道利	小鳥振興協会(飛騨清美里人むら)
3	赤尾 友和		48	上村 和生	メタセコイアの森の仲間たち
4	浅野 幸夫	NPO法人未来創造プロジェクト	49	萱場 振一郎	山と川の学校
5	足立 美穂		50	萱場 祐一	自然共生研究センター
6	渥美 宣二		51	苅谷 貴英	川島元気スポーツ少年団
7	有本 信昭	岐阜大学地域科学部	52	河合 計美	岐阜県生涯学習コーディネーターの会
8	安藤 直樹	ヤマセミの会	53	川地 辰美	エコミュージアム関ヶ原
9	井口 高広	橋本建設株式会社	54	上平 尚	
10	石神 真	山と川の学校	55	川尻 秀樹	森林インストラクター岐阜
11	五十川 龍仁		56	貴田 國雄	
12	伊藤 栄一	かしっぱ隊	57	北川 健司	NPO法人エヌエスネット
13	伊藤 修也	シーガルヨットクラブ	58	北村 光男	国立乗鞍青年の家
14	岩佐 美知子	NPO法人長良川環境レンジャー協会	59	木呂子 豊彦	
15	岩島 ひとみ	Nature club 屏風の森の葉っぱぱ	60	久保田 尚志	北方町ふるさと自然発見工房
16	岩津 正明		61	熊崎 登	NPO法人長良川環境レンジャー協会
17	井上 裕二	森林インストラクター岐阜	62	熊崎 浩之	飛騨小坂フォレストガイド
18	植田 裕史	NPO法人野外体験活動推進連盟	63	窪田 一仁	どんぐりの森実行委員会
19	上田 康美	ツリークライミング クラブ橙	64	久保田 達夫	国立乗鞍青年の家
20	上村 智彦	森林たくみ塾	65	小木曾 賢一	森林たくみ塾
21	牛澤 功	小鳥振興協会(飛騨清美里人むら)	66	小池 永司	馬瀬川フィッシングアカデミー
22	内海 洋太	森林インストラクター岐阜	67	古瀬 外俊	
23	内方 光甫	美笠建設	68	小橋 宏充	岐阜県立森林文化アカデミー
24	牛丸 久靖	日和田小学校	69	小林 繁	
25	江後 順之祐	山と川の学校	70	小林 義博	各務原市
26	遠藤 喜之	美濃青年会議所	71	小林 由幸	岐阜県農林商工部農業構造改善室
27	大澤 正弘	各務原市	72	小森 智	日本自然保護協会
28	太田 春代		73	近藤 聡	岐阜県ユースホステル協会
29	太田 宗利	山と川の学校	74	小森 敏行	森林インストラクター岐阜
30	大塚 義弘	メタセコイアの森の仲間たち	75	河村 志信	
31	大矢 正樹	小鳥振興協会(飛騨清美里人むら)	76	近藤 肇	自然工法研究会
32	岡本 由樹子	岐阜県立森林文化アカデミー	77	後藤 正臣	岐阜ビオトープ管理士会
33	小椋 美知男	乗鞍山麓五色ヶ原ガイド	78	酒井 なゆみ	ボーイスカウト岐阜美濃白鳥第1団
34	小野 憲次	NPO法人長良川環境レンジャー協会	79	酒井 稔	ぎふ草の根交流サロン
35	小俣 篤	岐阜県自然共生工法研究会	80	坂下 文雄	北方町ふるさと自然発見工房
36	小川 素佳	美濃青年会議所	81	櫻井 里栄	岐阜県立森林文化アカデミー
37	大塚 之稔	日本野鳥の会岐阜県支部	82	酒向 佑輔	市原木材
38	改田 哲	日本ボーイスカウト岐阜県連盟	83	真田 誠至	自然共生研究センター
39	梶浦 敬一	岐阜県哺乳動物研究会	84	澤田 美里	メタセコイアの森の仲間たち
40	春日井 敏之	森林インストラクター岐阜	85	桜井 義維英	NPO法人自然体験活動推進協議会
41	加藤 香	山と川の学校	86	志田 成夫	天生県立自然公園協議会
42	加藤 孝士	山と川の学校	87	島崎 雅弘	丸ス産業(株)
43	加藤 春喜	白川郷自然共生フォーラム	88	清水 伸也	岐阜県森林組合連合会森林調査部

44	加藤 裕章		89	志水 太郎	メタセコイアの森の仲間たち
45	金指 務	岐阜県森林インストラクター協会	90	下田 勝	山と川の学校

	氏名	所属団体		氏名	所属団体
91	白土 久仁子	岐阜県立森林文化アカデミー	136	原 令子	岐阜県ネイチャーゲーム協会
92	清水 裕		137	日比野 基宏	岐阜県森林組合連合会森林調査部
93	清水 佳子	天神川を考える会	138	東出 修一	五色が原ガイド協会
94	庄司 正昭	長良川自然学校	139	尾藤 政勇	南飛驒自然塾
95	柴田 甫彦	NPO法人長良川環境レンジャー協会	140	福寄 順子	岐阜県立森林文化アカデミー
96	下村 和人	日本旅行 名古屋教育支店	141	古川 勝彦	岐阜県中濃地域農山村整備事務所
97	實廣 美千子	メタセコイアの森の仲間たち	142	藤原 一成	文部科学省スポーツ青少年局
98	十文字 美世子	岐阜県立森林文化アカデミー	143	洞口 健児	アウトドアコーディネイツ
99	杉田 勇人	森林インストラクター岐阜	144	馬淵 志功	
100	杉山 三四郎	大きな木野外塾	145	前田 博	京都造形芸術大学
101	鈴木 健二	王子木材緑化株式会社	146	三浦 嘉門	メタセコイアの森の仲間たち
102	鈴木 章	杉の杜 学舎	147	三島 真	山と川の学校
103	関根 洋子	榊地建防災	148	三宅 正子	Nature club 屏風の森の葉っぱっぱ
104	仙石 恵洋	岐阜県自然共生工法研究会	149	三澤 慎一郎	岐阜県立森林文化アカデミー
105	高田 研	岐阜県立森林文化アカデミー	150	溝口 喜久	サイエンスワールド
106	高橋 敏之	岐阜県立森林文化アカデミー	151	水野 雅夫	ウッズマンワークショップ
107	高屋 良平	NPO法人エヌエスネット	152	武藤 貴幸	
108	田中 久治	国立乗鞍青年の家	153	武藤 千帆里	岐阜県立森林文化アカデミー
109	田中 美佐子	NPO法人長良川環境レンジャー協会	154	村上 欣央	メタセコイアの森の仲間たち
110	田村 明	朝日大学経営学部ビジネス企画学科	155	村雲 和裕	こもれびの里・東白川体験倶楽部
111	丹家 水		156	森 義高	王子木材緑化株式会社
112	辰野 勇	モンベル	157	八尾 哲史	岐阜県立森林文化アカデミー
113	千葉 篤志	メタセコイアの森の仲間たち	158	安江 敏	丸ス産業(株)
114	千葉 照淳	山と川の学校	159	安江 純一	ぎふ山の日ネットワーク
115	寺嶋 清子		160	山上 寛之	体験共育事務所
116	寺田 進	荘川開発	161	山口 勝久	
117	戸田 淳子	山と川の学校	162	山口 博史	岐阜県立森林文化アカデミー
118	友保 有起	NPO法人長良川環境レンジャー協会	163	山口 裕堆	新荒田川をきれいにする会
119	栃川 孝弘		164	山下 和子	メタセコイアの森の仲間たち
120	中井 一夫	高山市林務課	165	山下 誠弥	
121	中澤 治雄	岐阜県西濃地域農山村整備事務所	166	山田 俊行	白川郷自然共生フォーラム
122	中島 照雅	ひだ位山ふるさと学校	167	山本 喜美江	
123	中谷 友紀	山と川の学校	168	山中 亘	杉の杜 学舎
124	中谷 幸泉		169	谷地 央崇	
125	名和 あけみ	NPO法人長良川環境レンジャー協会	170	柳下	文部科学省スポーツ青少年局
126	中川 真澄	上石津町	171	弓削 美奈子	山と川の学校
127	中原 由起子		172	由留木 正之	山と川の学校
128	野々村 直子		173	吉真 陽子	天生県立自然公園協議会
129	野邊 葉矢香	メタセコイアの森の仲間たち	174	横屋 茂秋	丸ス産業(株)
130	野尻 智周	全国雑木林会議	175	和田 浩二	めいほう高原自然体験センター
131	羽賀 早紀	ガールスカウト日本連盟岐阜県第3団	176	渡邊 義弘	
132	畑中 敦	郡上八幡産業振興公社	177	和田 真由美	
133	服部 富雄				
134	早川 貴重	早川工務店			
135	原 弘展	森林インストラクター岐阜			

参加者データ

参加者一覧表(住所・性別)

	男性	女性	計
東京都	2		2
長野県		1	1
愛知県	4	3	7
大阪府	1		1
揖斐郡揖斐川町	1		1
恵那市	2	1	3
大垣市	2		2
大野郡白川村	2		2
各務原市	5	1	6
可児市	1		1
加茂郡白川町	3		3
加茂郡富加町		1	1
加茂郡東白川村	2		2
岐阜市	32	7	39
郡上市	18	9	27
下呂市	7		7
高山市	20	1	21
多治見市	1		1
中津川市	2		2
羽島郡川島町	1		1
飛騨市	2	1	3
瑞浪市		2	2
瑞穂市	1		1
美濃市	12	6	18
本巣郡北方町	2		2
本巣市	2		2
山県市	1	1	2
養老郡上石津町	1		1
不明	19	2	21
	146	36	182

参加者一覧表(所属・世代別)

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	不明	計
学生	1							9	10
学校			1						1
企業	3	2	5	6	3				19
行政	1	2	6	7	1			4	21
公営施設		2	3	1					6
その他	2	4	6	7	3			4	26

大学				2				2
民間団体	8	18	10	14		2		3 55
民間施設			1					1 2
私企業			1					1
不明								39 39
	15	28	33	37	7	2	0	60 182

アンケート結果

特別講演

1.期待以上によかった 14 2.よかった 73 3.どちらかといえば悪かった 3 4.悪かった 2

団体紹介(事例発表)

1.期待以上によかった 10 2.よかった 69 3.どちらかといえば悪かった 9 4.悪かった 2
(どちらともいえない 2)

分科会セッション1

<施設・機関が取り組む自然体験活動>

1.期待以上によかった 4 2.よかった 7 3.どちらかといえば悪かった 2 4.悪かった 0

<エコツーリズム・グリーンツーリズム>

1.期待以上によかった 3 2.よかった 17 3.どちらかといえば悪かった 1 4.悪かった 0

<教育旅行>

1.期待以上によかった 9 2.よかった 8 3.どちらかといえば悪かった 0 4.悪かった 1

<指導者・資格>

1.期待以上によかった 3 2.よかった 18 3.どちらかといえば悪かった 4 4.悪かった 0

分科会セッション2

<まちの自然体験>

1.期待以上によかった 4 2.よかった 5 3.どちらかといえば悪かった 1 4.悪かった 0

<学校教育と自然体験活動>

1.期待以上によかった 6 2.よかった 6 3.どちらかといえば悪かった 1 4.悪かった 0

<川>

1.期待以上によかった 1 2.よかった 8 3.どちらかといえば悪かった 3 4.悪かった 1

<森・山>

1.期待以上によかった 4 2.よかった 21 3.どちらかといえば悪かった 4 4.悪かった 1

(どちらともいえない 1)

総括にかえて

3月13日に美濃市の岐阜県立森林文化アカデミーで開催した「川と山のぎふ自然体験活動の集い」について個人的な感想を述べさせていただきます。

2001年4月からの学校週5日制実施に伴う子ども達の週末の居場所確保を目的にした第一次自然体験活動推進時代から5年が経過しました。その頃、文部科学省およびその関連団体が音頭をとって日本中で開催された自然体験活動関連事業には新しい時代の到来を感じさせる熱気みたいなものがありました。参加者は全国から集まり夜遅くまで熱い想いをやさしく語り合っていました。自然体験活動推進協議会（略称CONE）が認定する共通カリキュラムを修了したCONEリーダーが誕生し、彼らが日本中で子どもたちや大人向けの自然体験活動を開始してきました。

しかしこの5年間で、いろいろな問題が出てきました。環境教育や自然体験活動をなりわいとすることを目的に参加してきた若い人たちの一部は理想と現実の板ばさみになり、志半ばで去っていった人もいました。マスコミは学校教育現場で起きている学力低下を重視するあまり、自分達で解決策を見出すことを目的にした総合的学習や授業時間数の見直しを提起しています。地方行政では補助金削減対策として多くの町村は自立の道を断念し町村合併が進み、町づくり・村おこしの起爆剤として作られた第3セクターや施設の見直しが行なわれています。

今回開催された自然体験活動の集いには岐阜県内から自然体験活動を推進する多数の方に参加していただきました。CONEに関係する私達の努力不足のせいかもしれませんが、参加者の中にはCONEとは何かを知らない方も多数見受けられました。しかし、自然体験活動を推進している団体・組織と、地方で地道にグリーンツーリズムや森林保全管理などの活動をされている方々や施設とのつながり（共生）を大切にすることや、民間の主体的な活動に対して行政は助成金・補助金という旧来の方法でない支援活動を模索し始めたことが感じられ、個人的な所感として自然体験活動の第二世代の到来だと確信しました。

この活動が今後どういった形で展開していくかは現時点では予想が出来ませんが、少なくとも転がしてしまっただけの石を止まらないように未来につなげることが私達の使命だと思います。

川と山のぎふ自然体験活動の集い実行委員会事務局 浅野 純一(エヌエスネット)

